



Title	2000年度岩見沢分校卒業論文等概要
Author(s)	
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 22: 187-193
Issue Date	2001-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8741">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8741</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

## 2000年度 岩見沢校学士論文等概要

### 〈小学校教員養成課程〉

#### 「学校」教育系

**教育学** 今年度、提出された論文は22編であり、教育学の4つの研究室における取組を特徴づけるテーマであった。第1研究室からは、「児童会活動に関する研究」（高田めぐみ）、「学校・家庭・地域社会の連携～『YOSAKOIソーラン』から見えてくるもの～」（近井祐介）、「フリースクールに関する一考察」（吉伊宏子）の3編である。第2研究室は、「総合学習の歴史的考察－1920年から1930年代における池袋児童の村小学校実践を中心に－」（太田麻美）、「日本の現代における子どもと遊び～1970年代以降雑誌『教育』を中心に～」（中里明雄）、「日本近代における教員形成～明治教員制度史」（藤原健一）である。そして、第3研究室は、「小学校英語教育について」（奥山亜希子）、「教育評価研究－ポートフォリオ評価をめぐる～」（佐藤美和子）、「私の野外教育～大自然はらぺこ学校での実践を通して～」（関本勝幸）である。また、第4研究室は、「特別なニーズ教育という視点からとらえた日本における障害児の教育」（佐坂栄美）、「学校教育における障害児と健常児の相互理解～交流教育の実践を通して～」（佐藤絵里）、「障害児教育から通常教育への発信～一人一人に応じた学びの場へ」（藤川貴子）である。この12編は、いずれも自己の興味関心から取り組まれたものであり、将来の自分自身の教育実践活動を念頭に捉えて進められたものである。なお、1、2、3年生、そして、ロシアからの留学生、指導教官4名が参加し、発表会が開催された。

**教育心理** 以下の8編の論文が提出された。「フリーターの心理学的分類と諸特徴に関する研究－現代青年像の解明のための試論」「自己意識は同調を促進するか－親和動機及び同調動機の調節効果」「『看図作文』を活用した作文指導の検討」「小学生の問題行動と愛着－小学生版愛着測定尺度の開発と学校教育への応用」「JIFP図版を用いたIFEEL Storyの研究」「心の健康教育に関する研究－攻撃性適正化プログラムの実践」「介護等体験学習が意識に及ぼす影響について」「類似表現の使い分け意識に関する研究」いずれも実証的研究である。今年も意欲的な研究が多かった。

**総合教育** 第一研究室は、「日本の『公害教育』と『環境教育』の分析－日本生活教育連盟の『公害教育』『環境教育』を通じて－」、「小学校における『群読』指導の研究－群読を巡る授業構成論を中心に－」、「聾教育におけるコミュニケーション指導論の発展について－手話を用いたコミュニケーションの現状と課題－」の三本が、第二研究室は「さらなる死の自己決定権の確立に向けて」、「子どもの肥満－自分史より－」、「兵庫県、『心の教育』の実態」、「子どもの心身問題と学校保健」四本、計七本が提出された。

#### 「言語」教育系

**国語** 古典文学3、近代文学3、現代文学2、国語学3、国語科教育1の計14編が提出された。そのうち①『竹取物語』論、②形容動詞論、③日本語の変化についての一

考察—ら抜き言葉を中心に—、の3編が特に優れている。①はモノガタリの発生とその意義について考察するとともに竹取物語の出現と発展の過程を明らかにしたものである。②は形容動詞という品詞を職能、形態、意味の側面から肯否を明らかにしたものである。③は今日問題になっている「ら抜き言葉」を奈良朝から現代までの言語の内部的変化の課程を明らかにし、その必然性を論じたものである。

他の論文にも独自の視点からの問題意識がうかがえ、丁寧な分析や先行研究の追求がなされている。しかし論の構成や論証の深まりなどで惜しまれる面がある。ただ、論文により質的格差が生じてきていることは、今後の課題として検討が必要である。

## 外国語

今年度は、提出された15編のうち14編が審査を通った。内訳は外国文学8編、外国文化（アイルランドの現代音楽の歴史的背景）1編、英語教育5編であった。文学研究では、善と悪の対立、登場人物の性格の比較、キーワードによる作品分析、グリム童話が扱われたが、詩人デュラン・トマスの比喩の解読には研究の跡が見られた。英語教育では、言語習得と記憶、英作文における日本語の問題、言語習得における対話活動、会話における発話意図、多読と語彙力が扱われたが、いずれも実験と精緻な分析に基づいて着実な成果を挙げている。

今回は、参照や引用、記述形式など論文作成の基本的マナーへの配慮不足が目立った。一定の基準を示して指導してゆく必要を強く感じた。

## 「社会」教育系

## 歴史

本年度は日本史分野5編・外国史分野4編の計9編の学士論文が提出された。日本史分野では「元明天皇・元正天皇—母娘間の皇位継承における—考察—」、「東夷の『小帝国』日本—古代日本の対外意識とその実態—」、「武士の誕生と武家政権成立までの過程」、「関が原の戦い—その戦略と考察—」、「朝敵藩からみた戊辰戦争—会津・長岡藩を中心に—」がそれであり、外国史分野では「イングランドの宗教改革について」、「ヨーロッパの魔女狩りに関する—の考察—『魔女とは何か』を考える—」、「戦後責任について—ドイツを中心に日本と比較する—」、「パレスチナ問題を考える」がそれであった。

いずれも研究史の整理を踏まえた説得的な内容であったが、総じて外国史分野では時事的な、あるいは身近な問題関心の背景にある歴史事象に思索をめぐらせていく手法の試みが、日本史分野では原史料に基づいて論を構築していこうとする試みが、それぞれ目立ったように感じられた。無論、その到達点はまちまちであるが、いずれも歴史研究の基本を辿ろうとしている点は評価された。教採や就職活動等と併行しながらも、プロットを立て、信頼の置ける情報を収集し、説得的な表現を工夫するといった手順をきちんと踏んだ卒論作成の経験は、社会人となっても様々な局面で応用できるのではと感じさせられた。

## 地理

青山巧：「少子高齢化社会に向けてのまちづくり施策のあり方とその方向性—札幌市中央区都心近隣居住地域の場合—」；少子高齢化社会が急速に進行する今日、まちづくりは大きく変貌した。本研究では、札幌市中央区の山鼻曙地区の「まちづくりハウス」の活動やアンケート調査から、都心近隣居住地域の抱える問題点を整理し、今後の施策の方向性を検討した。

山崎繭子・安沢学：「札幌圏近郊都市における景観まちづくりの展開と住民参加の方向性—当別町スウェーデンヒルズと恵庭市恵み野の比較検討からの分析—」；今日のまちづくりのソフト化で、町並み景観が重要視されるようになった。本研究では、札幌圏近郊都市のスウェーデンヒルズと恵庭市でのまちづくりの展開から、事業者の関与や住民参加を比較し、今後の方向性を検討した。

河原和孝・福田剛：「空知地方における公共温泉施設の展開と入浴者の選択—札幌市内スーパー銭湯との比較から—」；今日空知地方には公共温泉施設が数多く立地している。この中で、南幌・ユニ・奈井江・メープルについて、入浴者の選択の要因や札幌市内の「スーパー銭湯」との施設・アクセス面の比較から、公共温泉施設の持つ課題を提示した。

**法 政** 今年度の法律学研究室からの卒業生は、一名という結果になった。卒論のテーマは「児童虐待」。タイムリーといえばタイムリーすぎるほどのテーマで、執筆者はどこに力点を置いてまとめるかという点が一番重要であったともいえる。結果的には、外国との比較を取り入れてのこれまでの状況、現状、制度、民間機関の試み、といった、一読して『児童虐待のこれまでのことがだいたいわかる』というにとどまるものになってしまっている。もっと、制度や民間機関の試みを客観視する立場からの問題点が明確にされてもよかったものと思われる。社会科教育研究室との合同発表での、「卒論に『学校』『教師』の位置付けが全くない」点が指摘されていたなど、内容に偏りもあった。

**社 経** 社会学グループでは、4編が編まれた。論文「高齢者像と福祉施策」は、高齢者福祉政策の根本的性格を規定する高齢者像の比較思想的吟味に、論文「高齢者をめぐるこれからの福祉政策」の検討は、諸問題の国際比較的抽出と今後の方向性の提示に、それぞれ特色をもっている。論文「社会福祉とジェンダー」は、福祉国家のジェンダー的構成の実態と問題性の総括的指摘において説得的であり、論文「脳死＝臓器移植における諸問題と自己決定」は、昨今多数派世論を制したかにみえる脳死＝臓器移植にはらませる諸困難と、そこで採用される自己決定という概念の陥穽を衝いている。期せずして、福祉と医療（ないし生命倫理）に関心が集中した学生であるが、いずれも、少なからず読みごたえのある好編である。

**哲 倫** 哲学（主に西欧思想中心）は4編。幼少期を中心としたニーチェの思想形成を辿ったもの、黒人問題をめぐるキング牧師（白人との平等説）とマルコムX（黒人優越説）との対極化させたもの、パラケルススを中心とした西欧錬金術思想の流れを辿ったもの、遠藤周作『沈黙』を中心にキリスト教の「棄教」を掘り下げたものであった。卒論は学生の自己確立の証し。指導上最も重視しているものである。

倫理学関係は今年度は平等に4本。印度と中国。日本は2本。上座仏教のスリランカへの伝播。孔子を中心とする死生観の変遷。弘真の研究。日本中世の子供観です。問題把握の契機は、倫藩Iゼミ。中学時代の先生から。立川流からの転化、教師への志望からと多様だが、早くから始める程、厚味がある。十年かけた喪礼からの孔子研究者は、北大修士にも合格した。去る者は語るなどいわれるが、卒論テーマは、2年生初めに出す事は、有効？授業内容とも関わる様であり、内容ある個こそ、本人の充実は勿論、社会も要求している。

**社会科教育** 本年度は提出論文は、1件である。「姥神大神宮例大祭の変遷」は、江差町の姥神大神宮の祭礼について、江戸時代から現在に至る祭礼日、担い手、山車の移り変わりを時期区分して、祭りが江差の経済や社会の仕組みと密接に結びついていることを明らかにした。昭和30年代以降の、観光資源としての価値をめぐる論争については、今日的課題であるだけに、もう一歩踏み込んだ分析が望まれる。

## 「自然」教育系

**数 学** 本年度は、

- ・「ガロアの倫理」
- ・「Excelによる統計処理技術の研究」
- ・「古典的な円と円周率についての概念を現代的な視点から研究する」
- ・「Web上の教育システム及び教材コンテンツの開発」

という4つのテーマで研究が進められた。

**物 理** 物理学研究室では3名の卒業生により2編の学士論文が提出された。今年度の卒業研究は両編とも小学校での理科教育を強く意識した研究内容であった

中越大資・佐藤卓朗「コンピュータを利用した理科の授業展開について－雪と氷を教材として－」は近年急速に普及したコンピュータとインターネットについて、小中学校における取り組みとコンピュータを用いた教材の現状を史料を元に論ずるとともに、雪と氷を対象としたストーリー型と図鑑型のコンピュータ教材の作成を試みた。

村上雅浩「理科の授業におけるものづくり活動について－水飲み鳥を例にして－」は新学習指導要領のものづくり活動に着目して、理科教育におけるものづくりの意義を論じ、水飲み鳥の制作を提案した。水飲み鳥は材料の入手やすさと加工及び修正のしやすさを勘案して3種類考案した。

**化 学** 以下の5件の卒業研究が報告された

学部卒業

大沢 綾子：染料について

宮本 青児：ビデオ編集技術を用いた動画教材の作成～DTVを用いた理教材～

吉田えりか：可視吸収スペクトルデータからのパソコンCRT上での色再現

宮崎 智恵：化学史と学校教育における原子・分子概念の変遷についての調査  
修士論文

池田 寛之：ネットワーク上で動きのある理科教材を提供する技術の試行

**生 物** (植物分野)「緑藻類の成長と生殖に及ぼす光の色の影響について」(久保亜花里)は、青色域と赤色域の光がアオミドロ等の無性および有性生殖へ影響することを示した。「利根別自然休養林における主なシダ植物の生活史および配偶体形成について」(曾我真澄)は、同一のシダでも北海道では、本州以南と異なる生態をもつことを観察した。「夏から秋にかけて開花する野生草本植物の実験教材化について」(田中隆範)は、葉、茎の表皮や組織、花の構造について多くの野生植物を用いて検討した。

(動物分野)「キイロショウジョウバエの触角感覚器および触角葉糸球体の性決

定機構の解析」(結城理奈)では、脳、神経系の性差が生まれる仕組みについて解析した。「キイロショウジョウバエ翅のプログラム細胞死の解析とプログラム細胞死に関する遺伝子の同定」(早坂義弘)、「キイロショウジョウバエmcd遺伝子の解析および細胞死関連遺伝子のスクリーニング」(木村由紀)では、「細胞死」がどのように遺伝的プログラムとして組み込まれているか解析した。

**地 学** 2000年度の卒業論文は、北部北海道中川町一天塩町周辺地域の新第三系及び第四系の層位学・古生物学的研究である。本研究の主要課題は、①中新統稚内層の堆積環境と貝類化石群の性格、②稚内層・声問層・勇知層・更別層の微化石による年代決定、③“鮮新統”勇知層と上位の更別層の層序関係の再検討である。

①については従来の見解を踏襲するにとどまり、新たな知見は得られなかった。②に関しては、珪藻化石の分析により各層の地質年代をほぼ確定することができた。③については、綿密な野外調査により勇知層と更別層が不整合関係にあることが判明し、隣接地にあたる昨年度の卒論成果を再確認することができた。

その結果、中川町周辺地域では、勇知層と更別層は不整合関係であることが明らかになった。しかし、室内作業の遅れがデータ不足につながったのは残念であった。

## 「芸術」教育系

**音 楽** 本年度は、声楽やピアノの実技に関する論文が4本、バンド指導にかかわるものが2本、音楽教育についてのものが5本あった。

実技では、声楽の「変声期の男子生徒に対する発生指導に関する一考察」、ピアノの「子どもの成長に合わせたピアノ個人指導についての考察」といった指導法にたいしてのもの。また「ピアノとマリンバのアンサンブルについて」、「声楽のピアノ伴奏におけるアンサンブル技法」といったアンサンブルについて考察したものもあった。バンド指導に関しては、「小学校スクールバンドについての一考察」、「生涯学習における市民バンドの活動に対する一考察」と、対称が違ったバンドの指導法について論じられている。

音楽教育は、「音楽教育における合唱指導の工夫」「小学校音楽科で実践できるピアノ教育の可能性について」「子どもの全員が楽しく学習できる、望ましい音楽科教育への転換」「シュタイナー学校の音楽教育」「リトミック的アプローチによる障害児の音楽療法」といったように、学校教育からさらに広がった部分におよぶ音楽教育というものを考察した意欲に溢れるものであった。

**美 術** 絵画、油彩1名、版画2名。油彩は自画像を扱った心象風景、版画は文字とイメージによるメディア社会をテーマにしたもの、月をテーマにしたリトグラフ。彫塑は2名、水滴と水の波紋を使った、音と映像によるインスタレーションと土を使ったインスタレーション。そして半身の塑像。工芸は2名。組み木による立体造形、異なる木の色と素材を生かした家具と造形作品。美術教育は論文3名。現代美術の中のマンガ表現とその背景にあるもの、総合学習と関わる美術教育の可能性。環境問題をインダストリアルデザインがどのように取り組んでいくのかというもの。絵画、彫塑、工芸はそれぞれの作品と関わる論文が、美術教育はシルクスクリーンの版画とビーズを使ったインスタレーションが提出された。今回は美術教育のみならず実技形の学生も意欲的に論文に取り組んでおり、自己の表現が今日的課題とどのよう

にかかわるのかについて客観的に捉えられるきっかけになっていくと思われた。

## 「生活・健康」教育系

**体 育** 今年度は心理学に関わる論文が1編、動作分析に関わる論文が4編、生理学に関わる論文が1編であった。それぞれ体育科教育、スポーツ指導の課題と学生個人の問題意識を反映した内容であった。以下は、その6編の卒業論文のタイトルである。「心理的ストレスが運動パフォーマンスに与える影響について」(後藤史佳)、「伸膝前転における熟練者と非熟練者の比較」(伊東由佳・前田裕希子)「ワイドアップとクイックの投球動作の三次元的比較検討」(澤寛之)、「クイックスパイクにおけるジャンプ動作の運動特性」(佐々木吉子)、「発育発達段階における投球動作の比較検討」(長嶋義博)、「運動療法と食事療法が身体組成に及ぼす影響」(金田浩美・宿谷真由美)

**技 術** 機械グループ4名  
1名は、Linux OS (無料ソフト)を使用した小・中学校用コンピュータネットワーク用サーバの構築を試みた。さらに、そのサーバのマニュアル作成もした。  
3名は、共同でパソコンの構成部品をパネル上に配置し、それらを結線して実際に動くようにして、個々の部品の働きを生徒に視覚に訴えながら学習を進める教材を作成した。(奥野 亮輔)  
電気グループの2名は「電気エネルギー～その利用方法と授業研究～」をテーマとし、電気エネルギーから動力、光および熱エネルギーへの変換に関する教材を検討し、それぞれの学習指導案を作成した。(中村 岩美)

**家 庭 科** 「高等学校における家庭科男女共修について」「男女共修時代の家庭科教育の課題」は歴史的跡付け、共学化運動、教科書・教育実践の分析を基に共修家庭科の意義と課題を明らかにした。「黒色とフォーマルウェア」は、実験からフォーマル用布地には「光を反射する光沢」と「つややかさによる光沢」が要求されることを明らかにした。「布でできたおもちゃの開発と保育教材化への適用」は手作りおもちゃの意義を明らかにし、教材化した。「知的障害養護学校高等部における食生活活動に関する教育の現状と課題」「食生活改善の取り組みと中学校家庭科食領域における一提案」は、自立した生活者として食事を整える力を育てる食生活領域の授業を構想した。「性教育」「若者にみる現代の『性』」は人間形成および自立の視点から性を捉える性教育の意義に着目し、家庭科教育における共生と自立の教育への展開を提案した。

## 〈社会教育課程〉

### 社会教育コース・教育グループ

教育グループのテーマはいつも現在進行形が多い。スポーツの分野で流行しはじめている新しいスポーツについて調査したのは、「フリースタイルに対するスキューターの意識調査」(澤田竜)。若い世代に広がる予感が感じられる。欧米ではすでに教育に定着しつつあるが、日本では遅れているメディアリテラシーについては、「メディアリテラシーメディアとの関わりあい」(田下晃弘)。とくに黒人のステレオタ

イブ的表現をとりあげた。少子化が問題となっているが、育児には経済的な国家の支援を必要とするのは「児童手当制度についての一考察」(和田裕子)。自治体のホームページを全道分調べ、住民にとって使われやすいようになっているか、分析したのは「地域情報化とホームページ」(平田聡子)。どれも新しい知識をもたらすものであった。

### 社会教育コース・心理学グループ

大学の研究室における人間関係を分析した「大学の研究室における対人関係の特徴」、文献研究を通して対人恐怖に関する要因に整理を試みた「対人恐怖のスケッチー対人恐怖研究の概観と課題ー」、親や夫婦の関係が青年期の心に及ぼす影響を調査した「青年期の抑うつ傾向に及ぼす親子関係、夫婦関係の影響ー父、母、子それぞれの認知からー」、育児雑誌への投稿を手がかりに育児負担感について分析した「育児負担感の解剖ー育児負担感の分類とその特徴ー」、知的障害者の身体活動の実体を事例を通して分析した「知的障害者の生活実態に関する研究」の5編が提出された。また知的障害者のイメージに対する接触経験などの影響を分析した「知的障害者に対する学生の偏見の形成についての研究」が審査された。

### 社会教育コース・自然科学分野

本年度の自然科学分野における卒業論文は次の5編である。「高齢者の生涯スポーツーテニスについてー」(砂澤 栄家)は、高齢者の生涯スポーツとしてテニスを取りあげ、それが心身の健康を維持するために如何に有益であるかについて論じている。「地球環境と生産力の発達過程について」(須見 郁子)は、近年の地球規模での環境問題に関して、物質の大量生産による自然破壊の内容を科学・技術の発展過程をもとに多面的に論述したものである。「現代社会におけるスポーツの役割ーテニスを例としてー」(石川 潤)は、スポーツが現代の人々のストレスを解消するために、あるいは健康維持のためにその役割が大きいことを、テニスを例に論じている。「商品の信頼性と消費者の関わりについてー化粧品成分及びその表示をめぐるー」(小林 絵里香)は、2001年度から実施される化粧品の成分表示について、消費者の立場から調査・検討を行っている。「過冷却水において生成する氷結晶の研究」(西野 浩朗)は、低温実験室において過冷却水の中に円盤状の氷結晶を生成させ、その形態と成長過程について観察した結果をまとめている。

### 社会教育コース・スポーツコミュニケーション分野

今年度は、体育科教育、スポーツ指導の課題と学生個人の問題意識を反映した内容の卒業論文が以下に示す通り7編提出された。「サッカーセンスと経験年数及びポジションの関連についての研究」(勘七誠)、「スポーツ関与に及ぼすマスメディアの影響」(高江洲義也)、「保健体育科教師の役割に関する一考察ー中学校保健体育科教員免許取得予定者の役割意識を中心にー」(澤山裕美)、「大学生のスポーツライフ・マネジメントに関する実態調査ー栄養・阻害要因に着目してー」(渡辺彩子)、「垂直跳びにおける反動・振り込み動作に着目した2つの跳躍方法についての実践的研究」(宮内みさき)、「パフォーマンス別にみた大学女子駅伝チームの比較研究」(岩清水陸)、「成長期スポーツ傷害に関する一考察ー北海道内の中学校、高等学校サッカー部所属の選手とJリーグ下部組織所属の選手を対象にー」(丸尾太陽)。